



J P C A

日本包装コンサルタント協会

〒103 東京都中央区日本橋人形町3-10-1
(かまち人形町ビル7F) (株)日本包装技術協会内

TEL:(03)3249-7875 FAX:(03)3249-6305

発行者 松本光次

編集者 木村勝三郎

石原昌具

会

報

No. 11 1993年(平成)5年8月

1. 地球環境に思う

会長 松本光次

近年とみに地球環境問題が重視され、容器・包装資材についても再使用、再利用、再生、エネルギー回収、あるいは廃棄物の処理の容易性などが要請されるようになり、企業における商品開発、販売促進、企業戦略もこの点に集中しているといっても過言ではない。

この端緒となったのは、人間社会の成長・発展の過程での地球環境への人為的な悪影響に関して「人類の危機」を叫んだ「ローマクラブの警告」に基づき、1972年に出版された「成長の限界」(大来佐武郎監訳・ダイヤモンド社刊)であった。本書はローマクラブがMITのメドウズ助教授らのグループの研究成果をまとめたもので、これまでの地球資源が無限であることを前提とした「経済と人口の成長について」の今後の対応に大きな問題を提起している。

「ローマクラブの見解」では、その序論でウ・タント国連事務総長が、

「事務総長として私が承知している情報からの結論」として、「国際連合加盟諸国が古くからの係争を差し控え、軍拡競争の制約、人間環境の改善、人口爆発の回避及びこれらへの開発努力に必要な力の供与を目指して、世界的な協力を開始するために残された年月は、恐らくあと10年しかない。」という誠にセンセーショナルな論説を述べている。

さらに、その第2レポートとして1975年に出版された「転機に立つ人間社会」(大来佐武郎・茅陽一監訳・ダイヤモンド社刊)では、そのまとめとして「世界の情勢と人類の将来に関する基本的な救済は、地球的関連での全世界の協力と長期的展望なくしては不可能であること、及び経済や政治の問題においてのみならず、早期に行うべき意思決定の遅れにより生ずる人為的災害においても、同様に損失は途方もなく恐ろしいものである」と述べ、過剰人口や大飢饉の不均衡な発生、エネルギーや資源の枯渇などに脅かされている状態で、どのようにすれば現在の人類社会を維持することができるであろうか?との問を投げかけている。

さらに1992年に出版された「限界を超えて」(茅陽一監訳・ダイヤモンド社刊)では、世界銀行の経済学者ハーマン・デイリーの提案で、

- 1) 「再生可能な資源」の消費ペースは、その再生ペースを超えるものであってはならない。
- 2) 「再生不可能な資源」の消費ペースは、それに代わり得る再生可能な資源が開発されるペースを超えるものであってはならない。
- 3) 「汚染物質」の排出量は、環境がそうした物質を循環し、吸収し、無害化できる速度を超えるものであってはならない。

との3つの簡潔な原則を示している。

我々包装・物流技術に携わるものとして、十分にこの原則を認識し理解して、その具体的対応について、身近で可能なものから個別の実現を図る努力をすることこそ目下の急務であると感ずる次第である。

2. 中・南米紀行雑感

理事 三浦 渉

地球儀を回すと、丁度日本の裏側に当たる所に南米があり中米と併せてラテンアメリカと称される。一口に南米と言っても、日本の面積の50倍近くの広さがあり、南米だけでも10ヶ国余りの独立国がある。アルゼンチンのブエノスアイレス迄は日本から往復4万キロの行程で、これは地球の赤道一周の距離に相当する。業務の関係で数次に亘って当地を訪れたが、まだ5ヶ国のみで広大なブラジルは含まれていないので、ラテンアメリカを語る資格はないけれど「休憩室」のつもりで思うままに書いてみた。

ラテンアメリカ或いは南米と言っても、ここはスペインやポルトガルを主とする欧州のラテン民族の影響を強く受けている。この地域に対する個人のイメージは、それぞれに異なったものであり、「コンドルは飛んでゆく」を想う人も、リオのカーニバルのサンバ、アルゼンチンのタンゴを連想する人も多い。業務出張では考古学や風景を見るということとはできないが、根幹に流れる文化や思想を念頭に置いて展開すれば、その充実感も得られる。

－アスタ・マニャーナ精神とアミゴ精神－

南米は、各国とも程度の差はあるとしても、他民族の混合社会である。

この混合社会は「移住者の天国」と呼ばれ多岐の文化を形成し、陽気な文化、例えば、サンバ、マンボ、タンゴ等は、陽気でエネルギッシュなラテンアメリカ人の性格をよく表している。そして、南米を旅行すると、「アスタ・マニャーナ（また明日）」という言葉に見事に象徴されているように思える。ところが、一見すると悠長でルーズな生活態度ともとれるこの言葉は「アミゴ（友達）」というもう一つの言葉と表裏一体である。

「アミゴ」になれば、ビジネスライクな「アスタ・マニャーナ」精神とは異なる親密な人間関係がそこに生まれる。

ラテンアメリカでは、一般に仕事の前倒しは概ね行うことはない。この仕事は明日やってもよいということであれば、今日はやらない。「アスタ・マニャーナ」には日本語感覚で「明日(あした)間に合うなあ」を感じる。個人の生活を特に楽しむ彼らの夜の時間は長い。家庭に招待された場合、夜の9時頃が一般的であり、食事でありつけるのは12時頃である。それから街へ繰り出す、従って街が眠りにつくのは午前4時頃である。事実、街のナイトスポットの主役の小劇場のタンゴ、フォルクローレの開演は、11時前後である。因みに自分の仕事を終え、街で食事をして折角の異国だからとフォルクローレを鑑賞し、明日の仕事の時間も考えてホテルに帰ると、入れ代わりに、ナイトドレスの宿泊客が連れ立って街へ繰り出して行くのに擦れ違ふ。

Oh Magnifico

3. お酒と大けが

理事 齊藤 龍太郎

今までにお酒の上での大けがも再々、一番ひどかったのが5年前、その日は出先でお昼すぎに仕事が終わりに、連れもお酒が好きなものだから、食事もしないでチョット一杯やり始めました。都内に戻ったのが4時すぎ、ついつい又別の一人を呼び出してハシゴ、最後に新橋のそば屋で仕上げのそばを食べ、さて2階から降りるとき足を滑らせて転落、頭を打って気絶し、いびきをかいたそうです。

そのとき、誰か心得ていた人がいて、いびきをかくのは危険だと、直ぐに救急車を呼び慈恵医大へ、夜通し4時間の大手術で、目が覚めたときの医師の第一質問「目の前にいる人が誰だか判りますか」というのは、よく過去の記憶をすっかり失う例があるとかで、「家内と息子です」と言った私の発言に医師もほっとした顔でしたね。

それから数ヶ月後遺症が残りました。それは、全く匂いと味がわからず、あれだけの酒飲みが一滴の酒も飲めなかったことです。そんな筈がないと自分で言い聞かせ、おちょこ一杯のビールから再スタート、やがてはまた元に戻りました。

ところが2年前、又飲んだあと今度は何かにつまづいて転びました。そして又頭を打ちました。本人はしっかりしていたつもりですが、又々救急車、今度は地元の鎌倉の病院、直ぐに意識も何も戻りましたので一晩で退院、そして再診のため慈恵医大を訪ねました。

お酒とお脳

頭の検査には、昔はCT (computer tomography) の輪切り写真がありますが、細部にわたってはそれ程詳細ではなかったとのことでした。私もその検査では全く異常がないと言われていました。そして10年位前に、MRI (magnetic resonance imaging) が開発され、それはもっと詳細に脳の輪切りを撮り出します。そのMRIを撮るには順番があってすぐには撮れず時間がかかりますが、それで又診断してもらいました。

主任教授のドクターの第一声、「あなたは若いときから相当お酒を飲んでいましたね。このMRIの写真がそう言っていますよ」「全くその通りですが、そんなことまで判るのですか」と私、「年齢標準よりも脳が大分縮んでいますからね」と教授。

そのあと担当の医長に主任教授からこう言われましたと報告したところ、「気にしない、気にしない。あなたの身体はどこも悪い所はないから、毎日お酒2合位は構いませんよ」と言われて、それ以来ずっと2合で終わりにしていますが、これでよく判ったことは、お酒を毎日2合で済ませると、私にとってはそれは薬だという感じ、健康にもよいという感じ。

最近物覚えが悪くなってきており、又忘れっぽいですね。しかし、これはお酒のために末梢神経の傷みが早くなったということではなしに、年をとってきたから、ということにしておきましょう。

編集後記

第8回定時総会の事業計画で、会報の編集方針を改善し、年間6～10回発行して、会員への情報サービスの充実を図ることになりましたが、その実施については事務局の問題もあって対応がやや遅れています。そこで、役員の方々とご相談して、取り敢えず会報を発行することで会員皆様方とのコミュニケーションを図りたいと、無理にご投稿をお願いして、松本会長、三浦理事、斉藤理事のご三方のご原稿を頂戴し、会報 No. 11を作成しました。

会の活動を活発にするには会員相互のコミュニケーションが大切です。そのために会報をご利用して頂きたく、皆様方の活発なご投稿をお待ちしています。

ある経営コンサルタントの会の総会で、産能大学の経営情報学部助教授宮城まり子先生の「心にふれるマネージメント」という特別講演を聞きました。

その要旨は、「最近の若い人は、あまり他人に心を開かず、しかも、自分で考えるよりも直ぐに答を聞きたがる。こういう人達に心を開かせ、自分で考えることを習得させていくには、カウンセリングが大切である。

その方法は面談をしている際に、①相手の話す事実を受容すること。②相手の気持ち・感情に共感を持つこと。③欲求を素直に聞いてあげること。の3つが必要で、よく聞くためには、①相手の目を見る。②話に頷く。③ときどき質問をする。④相手の話の要点を繰り返す。⑤相手の沈黙を辛抱強く我慢し、発言を待つ。⑥よい助言を与えようと力まないで素直に助言をする。ことが必要である。」とのことでした。

この話は、私たちコンサルタントがクライアントに対するときにも極めて有効な方法ではないかと思いましたので、ちょっとご紹介しました。 MI生